



第127号

平成23年10月1日発行
発行所
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
☎095-824-5494
発行人
小川大天
(株)昭和堂

これからの玉園同窓会



社団法人長崎大学
玉園同窓会会長 小川大天

本会の目的は、定款 第五条に「本会は会員の親睦・互助を図り、併せて教育の振興に寄与することを目的とする。」第六条に「第五条の目的を達成するために左の事業を行う。」とあり、

一 会員の親睦互助に関すること。
二 母校との連絡・支援に関すること。

また、平成二十三年度の評議員会においては、公益的支出については「教育の振興」という具体的な項目を考えることによって、もっと高額になるようにできるはずだ

三 教育上必要な事項の調査研究・広報に関すること。
四 その他本会の目的達成に関すること。

この六条に基づいて、現在十七ページの支出の部にあるような事業を実施している。

長崎大学の図書館への図書購入費への助成（現在実施しているが、金額を増額したい。）

さて、本玉園同窓会も、現在まで、公益的支出と考えられる事業を進めてきている（会報の発行、教育学部への助成等）。

しかし、これではまだ第五条の「教育の振興」という目的には、ほど遠いように思われる。

そこで、いま述べた○の項目については、もっと金額を多くして助成するようにしたら、本同窓会も長崎県の教育界の中で、その存在価値が見直されるのではなからうか。

ここで問題になってくるのが、収入面である。

会員数を見てみると、長崎県外に在住している会員 三千人弱

この中で、年会費壹千円を納入してくれる会員は、毎年、百六十人程度である。

県内に在住している会員は、三千人強で、会費納入者は二千七百人程度である。

なお、会費納入については毎年、会報の十月号と同封して「会費納入のお願い」をしている。なお、会報は、会費未納の会員にも毎年、送付している。

以上のような実態であるので、会費の納入については、よろしく願いたい。

主題 「我が校における教育課程編成の改善と実践」

本会報「たまごの」(二二五号)における南有馬中学校・織田正一校長先生の言葉です。「新学習指導要領完全実施を目前にし、教育振興ではなく、教育の再生という言葉が使われているが、何故か。それは、学校への信頼度、尊敬度が低落していることに起因しているのではないかと思う。」

(省略)

各学校は、教育再生を目指し、学校が子どもにとって安心して学習できる場であり、保護者や地域の皆様に信頼される場になるよう、自覚を新たに新年度をスタートさせたところだと考えます。

小学校においては、新学習指導要領告示以来、「ゆとりと充実」の教育を振り返り、「生きる力」の育成という理念のもと、地域や学校の実態及び子どもの心身の発達段階や特性を十分考慮して、特色ある教育課程を編成し、完全実施をスタートさせたところだと思います。

また、中学校においては、二十四年度の完全実施を見据え、移行期間最終年度における各教科等固有の実践上の課題を洗い出し、その課題解決に向けた手立てや方策を検討し、最終年度の取り組みを進めている最中だと考えます。

そこで、玉園同窓会におきましても、本年度一年間、表記主題を掲げ、各学校の取り組みの現状を紹介し合い、「知識基盤社会」といわれる時代を切り拓いていく教育の在り方について、教育再生に向けた研修の場にしたいたいと考えました。

小学校外国語活動の円滑な導入と適切な実施にむけて

諫早市立伊木力小学校長 池 永 義 則



「道に迷っている外国人に出会った時、道を尋ねられたらどうしますか？」六年生外国語活動の授業の一場面である。学習指導要領の改訂で外国語教育の充実を図ることに重点がおかれ、小学校における外国語活動が今年度より高学年において完全実施された。本校は、毎週水曜日全学年で英語活動・外国語活動の授業を実施し、全教職員で研修を行い、協働体制で英語活動・外国語活動に取り組んでいる。小学校外国語活動の円滑な導入と適切な実施にむけての本校の取り組みの一端を紹介したい。

一 めざす児童の姿の明確化

外国語活動においてどのような児童を育てていきたいのか、本校の職員全員が明確な目標を持ち自信をもって指導していけるように、

「めざす児童の姿」や「学年の目標」を検討した。本校の児童の実態や外国語活動が新設された趣旨や小学校学習指導要領に示された外国語活動の目標及び内容を踏まえて設定した。また、外国語活動全体計画も作成し、「めざす児童の姿」「学年の目標」が明確になり、指導がしやすくなった。

二 カリキュラムの改善

一年生から四年生までの英語活動は、学校裁量の時間を活用したカリキュラムへの見直しを行い、外国語活動につながるように作成した。高学年は、これまでのカリキュラムと「英語ノート」の指導計画との照合を行いながら作成し直した。また、「英語ノート」の主な英語表現、指導内容が中学校一年生の指導内容にどのようにつながっているかも検討を行い、「指導計画系統性」としてまとめ、外国語活動で指導する内容と中学校の指導内容との関連を明らかにし、カリキュラムを改善できた。

三 指導と評価の一体化

外国語活動の評価の考え方、評

価の留意点、評価の観点等について研修を行い、外国語活動における評価基準や評価方法について共通理解を行い、「外国語活動年間指導計画評価表」を作成した。また、「自己評価カード」を作成し、「聞く」、「話す」、「関わる」の三つの視点から自己評価を行わせ、活動への取り組みを見とどけるようにした。毎学期、英語活動・外国語活動のアンケートを実施し考察することにより、児童の実態を把握し、指導に生かすことができた。本校卒業生へのアンケートも毎年実施し、本校の外国語活動の指導方法やカリキュラム等の検証にも力を入れた。中学校区での授業参観等を通して、情報交換・意見交換ができ、中学校との接続を意識した授業実践、カリキュラムづくりにも取り組むことができた。

四 今後の課題

新学習指導要領の移行措置期間の実践を踏まえ、今年度スタートしたばかりの外国語活動がさらに充実したものとなるために重要なこと（課題）を最後に述べたい。

まず外国語活動の目標であるコミュニケーション能力の素地育成の基本理念を教師自身がしっかり理解すること。そのための研修を充実させること。次に教師が英語を使う等身大のモデルとして児童

の実態を生かしながら指導し、児童が体験的にコミュニケーション能力の素地を体得できるような活動を工夫すること。そのための授業研究会を充実させること。そして指導が子どもの実態に合っていたか、目標が適切であったか等の評価をしっかりと行っていくこと。そのための指導と評価の一体化を

少人数に効く教育課程



吉岐市立志原小学校長 山田芳弘

進めること。このように、まだまだたくさん課題がある。その一つ一つに真摯に取り組むことで小学校外国語活動をさらに充実させていくことができると思われ、全職員力を合わせ本校の英語活動・外国語活動に取り組んでいきたい。

本校の校長として四年目を迎える。この四年間、わが校は流動体のように絶えず形の変化を遂げてきた。児童数の減少による二つの複式学級の誕生、知障・難聴の二つの特別支援学級の開設など、学級編制は毎年激変し、ようやく四年目にして流動は収束を迎えたのか、昨年度と同じ形状を保っている。単式二学級、複式二学級、特別支援学級二学級と、バラエティーに富んだ学級編制である。

図らずも新学習指導要領完全実施と時期を同じくしてやっと固まった。数が増えて多様化するのには自然な現象だが、児童数が減るにつれて多様化するのには面白い。いや面白いのはその多様さそのもの。三種類の音色の響き合いが実に楽しい。しかし、その多様さゆえに新教育課程編成には大きな苦労があった。

まずは、二つの複式学級である。授業者の人並み外れた労力と高度な指導技術を要するが、通常は異学年同時異内容の授業（いわゆる「ワタリの授業」）を行う。しかし、理科、音楽、家庭科などは二つの異なる学年の活動内容が同時進行では物理的に不可能に近い場

合が多く、補助員が必要だ。体育、道徳、総合などの教科等では、二つの学年の全内容をA年度実施とB年度実施に分け、異学年同時同内容の授業（「A・B年度制の授業」）を仕組む。いずれにせよ、複式では教育課程編成そのものが一大事業である。

次に、二つの特別支援学級だが、知的障害学級児童二名と難聴学級児童一名のそれぞれの子どもに合った教育課程を編成する。目標も評価基準もその子独自のものが必要で、個別の支援計画をもとに指導計画を作成しなければならぬ。だが、ここでのポイントは、当該学年の学級児童たちとのかわりである。どの教科、どの単元で交流させるか、担任同士の綿密な相談と緻密な計画が必要だ。人は人を浴びて人となる」という名言どおり、メニューは多少異なるが、集団の中にいるという環境こそが最大の教育効果を生み出すのを目の当たりにしてきた。それは受け入れる学級の子どもたちにも同様である。学級間の壁は曖昧だがそれでよい。社会という学校からの出口は一つなのだから。一年・二年という二つの単式学級においては、新教育課程編成特有の苦労があった。学習内容や時間の増加には多少の驚きはあった

が、「活用」や「言語活動の充実」といったキーワードにはそれほど戸惑いはなかった。なぜなら、それらは本校のような小規模校には昔から立ちはだかる大きな壁で、それを打ち破るための奮闘が日々続いているからだ。少数数であるがゆえに習得は徹底できても活用するだけの柔軟性に欠け、少数数であるがゆえに意思の疎通が安易にでき、語彙や多様な表現には乏しい。ならば、と全教科、全教育活動のあらゆる場で意図的に言語活動を仕組む。学んだことを生活

の場で使わせるための発展的な活動を留意する。今まで知恵を絞って汗を流してやってきたことを確認し、前に進むのみである。改訂のキーワードはトップダウン式に現れない。常に足元に在る。離島の子どもたちはへき地という環境から純朴さが守られている。私たちの使命は、外からではなく内から自己を守り伸びていく力をもたせることだ。この教育課程は子どもの内側に果たして効いているのか、絶えず吟味を続けなければならない。

新学習指導要領の全面実施に向けて

大村市立萱瀬中学校長 北浦 幸三



本校は、大村インターチェンジから佐賀県鹿島市に通じる国道四四四号線沿いに車で十分ほどに位置し、生徒数七十二名・四学級・教職員十四名の学校です。校区内小学校のうち一校が特色ある教育活動推進のため校区外通学を認め

ていることもあり一割強の生徒は校区外通学です。生徒は、温厚で日々の学習活動にまじめに取り組んでいます。先般、来年度から使用される教科書の見本をみて、それぞれの教科書が、趣旨をふまえてよく工夫されているのに感心し、叶わないとはわかっていてもこのような教科書でもう一度学び直したいと思ってしまう。「生きる力」の理念を継承した新学習指導要領の全面実施に向けた本校の取り組み

一 生徒指導の充実

「生きる力」をはぐくむ基盤づくりとしての生徒指導の充実、引き続き大切にしたいと考えています。教職員の共通理解を図り学校教育活動全体を通して「時を守り、場を清め、礼節をつくす」「学習規律に係る指導事項の徹底」「配慮を要する生徒が登校しない場合は、その日に家庭訪問」など、よりよい学校生活を行う上で必要と考えられることを地道に行っています。不登校問題は、本市の教育問題の一つですが、市教育委員会が不登校者を減らすため各学校をよくサポートしていることもあり、本校には不登校者はいません。

二 確かな学力の育成

教科等の授業時数については、平成二十一年度から選択教科を学校選択として実施したり学校裁量で指導時間数を増やしたりすること、新教育課程の授業時数で実施しています。しかし、確かな学力の育成には、授業時数を増やすだけでなく教師の指導力向上が何より大切だと考えています。そこで、教職員の共通理解をもとに次のような取り組みをしています。

- ①指導案検討・授業・授業研究という流れでの研究授業
 - ②予習や復習などの家庭学習を授業と連動させた指導
 - ③教えて考えさせる授業についての外部講師招へい
 - ④各種学力調査の結果を生徒の指導に生かす校内研修などを実施しています。
- ①の指導案検討は、各教科の担当者は一名ずつですが、他教科の指導目標や指導方法に関心を取り組むことで、自分の教科指導に役立てています。②については、ノートの提出を通して学習面について指導するだけでなく生活習慣の指導も行っています。④については、本市・県・国単位の各種調査を実施しています。実施後、教科では、年間を五期に分けた検証改善サイクルに沿った取り組みを行うことで学力向上を図っています。全校的な確認・指導が必要な言語活動などについては、共通理解を図り改善に努めているところです。言語活動充実への取り組み例としては、学習指導案に位置づけたり朝読書の時間を活用したりしています。朝読書は、活動時間を十分間から十五分間に増やし読書のほか視写活動や読解力向上のためプリント学習を取り入れています。

三 その他の取り組み

- ①総合的な学習の時間の全体計画や年間指導計画
- ②二学期制の特長を生かした学校暦
- ③三十三年間続いている県立ろう

学校との交流活動をはじめとする
 体験活動 ④学習評価 ⑤校務分
 掌などの見直しと必要と考える実
 践を行っているところです。
 このような営みを通して、知・
 徳・体をバランスよく育て生きる

力をはぐくみたいと考えています。
 また、生徒の姿を通して保護者・
 地域から信頼されるような活気あ
 る学校づくりに努めていかなけれ
 ばと決意を新にしているところで
 す。

知・徳・体のバランスのとれた 生徒の育成を目指して

対馬市立今里中学校長 中島 清志



本校は、全校生徒十五名の小規
 模校である。校舎は浅茅湾に面し、
 近くではマグロの養殖が盛んに
 われている。また、背後には一面
 に田畑が広がっている。恵まれた
 環境の中で、生徒は生き生きと学
 校生活を送っており、保護者や地
 域も学校に協力的である。

本年度は、「生きる力の基とな
 る基礎学力と基本的生活習慣の定
 着を図り、常に心身を鍛えて自己
 実現を目指す生徒を育成する」と
 という学校教育目標を掲げた。そし
 て、これが具現化された生徒の姿

一 よく読み、よく聴き、よく考
 える生徒(知)
 毎朝、「読書タイム」と「プラ
 スタイム」という時間を、それぞ
 れ十分間設けている。教科担任が
 授業内容と連動した学習課題を作
 成し、生徒はそれを家庭で解く。
 そして、翌日「プラスタイム」で
 確認するというサイクルを繰り返
 す。定期的に確認テストを実施す
 ることで、生徒に継続の効果と意
 義を実感させるようにしている。
 学級担任は、家庭学習ノートを毎
 日点検し、生徒を励ましている。

この取り組みに加え、「学習の手
 引」を教科ごとに作成し、学習規
 律や学び方の指導に活用している。
 本年度は、家庭学習二時間を目標
 にさせているが、一学期に達成で
 きた生徒は二割にとどまった。家
 庭との連携を密にしながら、基礎
 学力の向上と学習習慣の定着を
 図っていききたい。

二 やさしい思いやりの心を持つ 生徒(徳)

平成十二年度に韓国の只沙(ちさ)中
 校と姉妹校縁組をして以来、交互
 に学校訪問をして交流を続けてい
 る。本年度は、本校の生徒の家庭
 に、韓国の中学生が数名ずつホー
 ムステイをする。この交流を軸に
 して、相手を敬ったり、異文化を
 尊重したりする態度を育てたい。
 また、本校は隣接する小学校と
 運動会や学習発表会等を共同開催
 している。行事の準備や練習等を
 通して、児童を思いやる心を育て
 たい。生徒は、懸命に努力する児
 童の姿に過去の自分の姿を重ね、
 先輩としての誇りや責任の重さを
 感じていくはずである。

三 たくましい健康な心身を持つ 生徒(体)

本校では、全員が早朝ランニン
 グに取り組んでいる。これは、体
 力や精神力の向上、生活習慣づく
 りに役立っている。一方で、疲労

の蓄積による学習等への影響、教
 職員の勤務時間など、解決すべき
 課題もあり、取り組み方の改善を
 進めているところである。
 以上、特徴的な取り組みを述べ
 てきた。しかし、知・徳・体のバ
 ランスのとれた生徒の育成には、
 特別な取り組みではなく、授業を
 中心に据えた日々の教育活動の充
 実が重要であることは言うまでも
 ない。

学習指導要領の移行期間が始
 まった平成二十一年度から、本校
 では週当たり二十九コマを基本と
 して時間割を編成してきた。来年
 度はこれを三十コマにする予定で
 ある。その実現には、行事や諸会
 議の精選、効率的な運営などが、
 従前にも増して重要になってくる。
 本年度は、残された期間を使って、
 教科等の授業時数が変化するとと
 もに、言語活動の充実などが求め
 られている背景や、今後の授業づ
 くりの在り方等を全職員で再確認
 したい。そして、真に「生きる力」
 の育成に資する教育課程の編成及
 び実施ができるように努めたい。

わたしの教育実践

朝の健康観察と黒板メッセージ

長崎市立南長崎小学校 河邊 悠希



「はい、元気です。昨日は僕の大好きなハンバーグだったのですね。うれしかったです。」

これは、朝の健康観察での様子です。私はこれまで、全員でつくり進める学習を目指して、子どもたちが安心して発表できる教室作りを心がけてきました。そのため、授業以外に、構成的グループエンカウンターなどの活動などを用いて、子どもが自分や相手を大切にしようとする思いをもって、聞き、話す場面を意図的に設定しました。その中の一つが、朝の健康観察です。返事をする時に、昨日あったことや好きな物の話、楽しみにしている学習などを、一言付け足して返すようにしました。最後に、友だちの話した内容に関するクイズを出したり、元気ではない人を確認し、みんなで心配しないうまく話しました。これは、誰もが無理なく話

すことができるだけでなく、子ども同士をつなぎ、私自身も一人ひとりをよく知る、貴重な時間となりました。

また、気持ちよく教室に入れるように、初任の時から毎朝、黒板に子どもたちへメッセージを書くようにしてきました。離任式の日には、逆に子どもたちから黒板のメッセージをもらい、あたたかい気持ちになりました。今でもよく覚えています。

子どもたちが安心して発表できるといことは、一人ひとりの居場所があるということです。それは、子ども同士や教師と子どもとの信頼関係ができていくということにつながります。初任から今日までは、本当にあつという間で、試行錯誤の連続でした。しかし、この六年間で、私は子どもたちから育ててもらったと思っています。子どもたちが「先生」と呼んでくれたから、苦しい事があっても、今まで頑張ることができたのだと実感しています。これからは初心を忘れず、いつも子どもの目線に立って考えることができる教師を目指して頑張っていきたいです。

思いやりを届けよう

佐世保市立日宇小学校 石丸 優美子



三月十一日、東北地方を大地震がおそいました。私たちにできることは何だろうか、そう考えた人も多いと思います。

「全校エール」「ベルマーク募金」私は、六年生担任、児童会担当として子どもたちとこれらのことに取り組みました。

最高学年として迎えた運動会。東北地方の学校の現状を知るたびに、子どもたちは「運動会ができる」ということは幸せなことなんだ」という思いを強くしていきました。そして、自分たちの思いを東北地方へ届けようと、プログラムのはじめに「全校エール」を行うことにしました。本来であれば、自分のブロックの応援をして気持ちを盛り上げるところですが、全校が一つになって東北地方へエールを送りました。

また、目に見える形でも支援を行いたいということから、「ベル

マーク募金」に取り組むことにしました。自分たちの手でベルマークを集めて、被災した学校へ届けようというのです。今まで児童会主体でベルマーク運動に取り組んだことはなく、全校への提案から始まり、収集方法の話し合い、地域への呼びかけ、ポスター作りなど、初めてのことにとまどいながらも運営委員会を中心に準備を進めていきました。二か月で、約一万五千円分のベルマークが集まりました。地域へ呼びかけた分の集計はまだですが、今後もっと集まるのではと期待しています。

「思いは見えないけれど思いやりは見える。」CMでおなじみのフレーズですが、私はいつもこの言葉を心に留めています。感謝の気持ちをもらった「ありがとう」と伝える、悪かったなと思えば「ごめん」と伝える、何かできることはないかと思えば行動に移すなど、思いを形にしていこうことはとても大切なことだと思います。特に、今年の子どもの姿を見ると、それを強く感じます。東北地方に届ける思いを、今、子どもたちと大切に温めているところです。

ルールづくりとマナー指導

長崎市立桜馬場中学校 橋本 聡



ふと気づくと教員生活六年目。縁あって、会報「たまごの」の原稿依頼を受けたこの機会に、これまでの生活を振り返り、私の教育実践を紹介させていただきたいと思えます。

初任地となった五島市での四年間、地元長崎市に戻っての二年間、たくさんの生徒や保護者、尊敬する先輩方との出会いのおかげで、未熟ながらも少しずつ自分の教育観を組み立てているところです。今年度の目標は、生徒たちを社会に通用する立派な人間に育てることです。長崎県の教員として、関わったすべての生徒が社会に必要とされる人材になってほしいという願いです。

そんな生徒を育成するために、学級経営において、特に力を入れて実践していることはルールづくりとマナー指導です。学級経営は「黄金の三日間」で決まるといわれます。私はその間、徹底的にルー

ルとマナーを教えこみます。一年生で四項目、二年生では八項目、三年生では十二項目です。中身はきちんとした身なりや元気なあいさつなど簡単なことばかりです。社会で必要とされる人間は、当たり前前のことを当たり前にできる人間のはずです。生徒の「これくらい、いいか」という甘い考えをなくすように根気強く、妥協せずに指導しています。たくさん褒めたり叱ったりすることはもちろんのこと、徹底のためのひと工夫があります。それは、日記帳と黒板メッセージです。これは生徒指導上の諸問題や生徒の心の変化をいち早くキャッチできるとともに、担任として、一人の男橋本聡として、生徒にメッセージを送るツールとなり、とても役立ちます。毎日の仕事が一時間増えますが、それだけの価値はあります。

今年度、顧問をさせていただいている野球部にスローガンをつきました。全力疾走・全員野球です。選手はグラウンドを常に全力で走りまわります。私も負けないように、全力疾走で日々の教育活動に励みたいと思います。それが私を支えてくださっている方々への感謝の気持ちと思返しにつながると思い、努力していきます。

今年で、大学を卒業して十三年、長崎県の教員として採用され、八年目を迎えました。さて、今回の原稿依頼に当たって、今までの教員生活を振り返ってみました。教師として七年と三カ月、思い出されるのは、本当に多くの失敗を重ねてきたということと、多くの人々に支えられてきたということです。

縁

佐世保市立宮中学校 昌子 久志



また、人生は自分の思うとおりいかないものであるという、実感です。現在、佐世保市の宮中学校に勤務しておりますが、私自身今、ここで教壇に立っているという想像はまったくつかないこととでもあります。もともと出身が

高根県であり、九州・長崎のことはほとんど知らない場所でした。大学時代の四年間を長崎で過ごし、現勤務地である佐世保市には、教員として採用されるまで足を踏み入れたことも無い、

このことを考えると、「縁」というのは、本当にどこに転がっているのかわからないものであると思います。今の私の人間関係も、ここに至ってはじめてつくられたものであります。まさに、「人間万事塞翁が馬」であります。佐世保に今、私がいるという事は、私にとって本当に偶然のできごとです。しかし、この八年間、その中で多くの先輩方、子どもたち、保護者や地域の方々と触れ合い、自分自身も変わることができました。授業や部活動などの諸活動を通して、子どもたちに自分の思いを伝えることができたであろうとも思います。

私の教育実践とは話がずれているとは思いますが、この「縁」を大切にすることが、教育の一つの柱であると確信しております。今後このことを胸に、教員生活を送っていきたいと思えます。

母校だより

日野 公 昭

長崎大学の改革と

教育学部の改革

長崎大学教育学部長 山路 裕昭



(1) 学長コメント

長崎大学の片峰茂学長は、昨年八月のコメントの中で、新学部設置、教養教育改革、既存学部改革の三位一体の改革の必要性を指摘し、さらに本年五月のコメントでも、同様の改革の方針を示しました。それらの改革の主な内容は次の通りです。

●新学部設置

東アジアをキーワードとした、特色ある人文社会科学系専門学部の平成二十五年度設置を目指す。新学部の学生定員は、教育学部と経済

学部の改革・改組に連動して、二百十〜百六十名程度、教員定員については教育学部や経済学部等から供出し、四十名程度とする。

●教養教育改革

平成二十四年度より、選択科目についてはモジュール（授業科目の集合体）選択制に基づく教養教育を導入する。また英語を中心とした語学教育体制を強化する。

●既存学部改革

教育学部については、学生定員を現行の二百四十名から百八十〜百九十名へ減員することを通して教員養成プログラムの改革を行い、特色ある教員を養成することにより、教員採用率の大幅アップを実現する。具体的には、①中学校教育コースを廃止し、初等教育及び特別支援教育の教員養成に特化する、②中学校教育コースは温存するが教科を厳選する、③中学校教育コースの全教科をふくめて現行の全教育コースをスリム化して温存するが、入試方法や教育カリ

キュラムの改革を通して特色ある教員養成を行う。

また教職実践専攻と教職実践専攻（教職大学院）からなる大学院教育学研究科については、教職実践専攻に一元化する。

(2) 教育学部の改革

長崎大学教育学部では、既に昨年度より、学部と大学院のあり方について検討作業を始めていたが、本年八月の臨時教授会において、学部については学長コメント③に対応する方向で改革を進めていくことを決定しました。入試やカリキュラムの改革等については、これから詳細を議論していかねければなりません。一部新聞等で報道された「中学校課程全廃も」ということについては、当面あり得ないことと考えています。今回の中学校教育コースの全教科を維持するという方針の背景には、いくつかの理由があります。

●優れた教員養成への期待

長崎県における教員需要は今後も決して明るい状況ではありませんが、ベテラン教員が大量に退職する時代を迎える中で、これまでに以上に高度の実践力を身につけた優れた教員を養成することが求められており、それに応える教員

養成が必要です。

●地域教育界への貢献

これまで、教員免許状更新講習の実施や各種研究会・研修会への参加、またサイエンス・ワールド等、さまざまな活動を通じて地域教育界に貢献してきました。そして地域教育界の教育学部への期待はむしろ増大する傾向にあります。それらの活動を今後とも継続していくためには、教員養成機能を維持していくことが必要です。

●教員養成制度改革への対応

中教審において、教員免許制度を含む教員養成制度改革が検討されています。それにどのように対応すべきかは、今後の中教審の審議の行方を待たなければなりません。

教育学部の改革を考えていく上では、これら以外にも考慮すべき要因はたくさんありますが、当面は学部入試やカリキュラムの改革、そして大学院教育学研究科の改革について早急に方向性を定める必要があります。

教育学部の改革は、ようやくその第一歩が踏み出された状況です。今後とも、多くの皆様のご意見を聞きながら改革を進めていく所存です。

東日本大震災と原発事故から思うこと

教育学部副学部長 中西 弘樹

以前から近頃の日本は、少しおかしいのではないかと思っていることが二つあった。これは深く考えたことではなく、日頃から何となくそう感じていることである。一つは

あまりにも経済中心になりすぎていると思えてならない。小泉政権以後一層その傾向が強まった。勝組と負け組の言葉が示しているように、効率ばかりを求め、「お金儲けがすべて」の世の中になりつつある。学問や教育ですら、経済の下に位置付けられているような気がする。美術館や博物館などの公教育施設はアメリカでもイギリスでも、お隣の韓国でも入場無料であるにもかかわらず、日本では入場料や駐車料金まで徴収し、さらに収益が少ないということ、人員削減や民営化が進んでいる。国立大学も法人化以後、交付金が削減され続け、大学は効率化の名の基に、研究費も人員も削減されてきた。評価と競争原理を導入す

ることで、一部の研究分野は進展するかも知れないが、十年以上かかって成果が出る分野も少なくない。研究も教育もすぐに評価できるものではない。長崎大学教育学部も教員定員を補充しないまま、不足した教員数で「よい教育」を迫られている。

もう一つは、科学技術に依存しすぎた社会である。科学技術の発展で、自然すらコントロールできると勘違いをした社会になってしまった。河川法や海岸法によって、洪水を防ぐために岸をコンクリートで固め、護岸をしてきた。しかし、半世紀たっても洪水は相変わらずおきている。身近な例を紹介してみよう。長崎県川棚川は、大きな川のない長崎県では珍しく下流部で大きく蛇行し、地形的に氾濫原をつくっている。この部分はこれまでたびたび洪水がおき、浸水してきたので、畑などに利用し、人々は居住してこなかった。しかし、りっぱな護岸ができ、住宅街や工場などが進出してしまった。今また、洪水が心配であるということ、石木ダムの建設が具体化

されようとしている。昔の人々は、長い経験から住む場所を決めてきた。地形を見るとそのことがよくわかる。しかし、現代人はブルトナーなどの重機とコンクリートを使い、地形を作り替えて利用している。自然の営力を無視した危険なことをしているような気がする。

自然のしくみは科学の発展によって明らかにされつつあるが、科学技術の発展はそれを反映していない。自然を無視しているのは、居住地の建設ばかりでない。二四時間営業の店舗や自動販売機、パソコン、携帯電話など便利なものがあふれており、町や家庭の中の環境すべてが人工的なものになってしまい、子ども達にとってよい環境なのかと心配になってしまう。三月十一日におきた、東日本大震災、それに続く福島原発の事故は、いろいろなことを考えさせられた。決して「想定外」の出来事ではなく、私には日頃から感じていた上記の二つのおかしな事と関係があるように思えてならないし、これまで別々に感じていた二つの

を気づかせてくれた。

私は学生時代に、日本中の海岸を植生調査のために訪れたことがあった。海岸に出るのに、古い町では最寄りの駅やバス停を下りて、居住区を過ぎ、耕作地を通り、広い松林を通り抜けてやっと海岸にたどり着く場合が多かった。過去に高潮や津波の被害を受けてきた経験からできた集落であったに違いない。新しい居住区は、海岸に城壁のようなコンクリートの護岸をつくり、その内側はすぐに宅地や道路、工場、商店街となっている。平坦な土地にそれらを建設することは経済的にきわめて効率のよいことである。しかし、自然を無視し、経済を優先したやり方は、危険の上に成り立っていることを忘れてはならない。

今回の東日本大震災と原発事故は、これから日本がどのような方向に進んでいったらいいのか、考えるきっかけをあたえてくれたように思える。

おたっぴやだより

日々是れ健日

横浜市 徳永 昭典
(昭和二十五年卒)



「おたっぴやでしたか。」何と心やさしいたわりのある言葉。本覧で「たっぴや」の文字を見る度に毎に各地でたっぴやに活躍している学友と長崎への郷愁を覚える。私は昭和二十五年長崎師範学校卒業後ただちに上京し、東京都の教員になった。定年退職後は横浜市の私立幼稚園の理事長兼園長として十年間幼児教育に精魂を傾けた。子どもたちの目の輝きと元気な姿に魅せられたのである。

その間、玉ぞの会東京支部の幹事会や総会などお互いに会った時、「たっぴやでしたか」と声をかけ合う時は楽しかった。しかし今はその声も薄れてきた。東京人に成り切ったからである。

私は今、一日でも長くたっぴやでいたいと思いでスポーツやいろいろな趣味に関心を向けている。

特にソフトテニスや週二回退職校長会の仲間たちや地域のテニス愛好家の人たちと白球・黄球を打ち合い、追い駆けていく。仲間の中には往年の強者共が大勢いるのでこれらの人に伍していくのは並大抵のことではないがたまにはチャンスをもつこともある。

旅行もよくする方だろう。国内では特に国立博物館の友の会の中に「青丹会」という古美術愛好家の会を作り、奈良・京都中心の古社寺や美術館、文化財巡りを楽しんでいる。

海外旅行では帰国後必ず旅行記を書き異国の文化に学んだ喜びをささやかな本にまとめている。その本が今二十冊を超えアルバムと共に書架に収まっている。

書道も退職後習い始めたものの一つであるが、生来の悪筆癖はいつこうに改善されず途中で止めたくなる時もある。しかし仲間の書に朱を入れる時の緊張感と責任感に即私への叱咤激励にもなっている。

横浜国大や神奈川大学も近くにがあるので公開講座にも出席しているが、覚えることよりも忘れることの方が多く、ひしひしと記憶力の減退を感じている。

私は今、このようにして自分の二度とない人生を有意義なものにしようと思ひ、日々健康に留意し、たっぴやでいたいと思ひしている。

学習塾で思っていること

平戸市 糟谷 進
(昭和三十八年卒)



各学校では新学習指導要領の具現化に向け、先生方のご苦労を痛感する。退職して十年を過ぎ、学校のこと等忘れてしまっていた。ところが、五年前、長男が、自宅で塾を始めた。はじめは係わらなかつたが、三年前より、受講生が増えてくると、個別指導や学力の差違など問題点が出てきたので、私と妻の二人も塾を手伝うことにした。

小・中学生の子どもたちと毎日係り合っていると、若さが蘇った。教材の準備・指導内容や指導方法の研究で、現職に返ったようだ。退職の時は学習指導以外の雑用が多く容易でなかつたが、今は一人ひとりの指導に専念でき、教材研究も家族三人で話し合い、工夫し

ている。

塾の理念として、子ども一人ひとりの確かな学力をはぐくむために、発達段階に応じ、「望ましい学習態度」や「望ましい学習習慣」を身につけさせて、「望ましい学習環境」を整備することとした。特に、「学習態度の基礎・基本」を重視していくことにした。勿論、指導要領に示された基礎・基本の徹底という学習内容も大切だが、それと同時に、学習姿勢そのものを重視している。

- ・椅子にきちんと腰掛け、背筋を伸ばして学習する。
- ・よい姿勢で本を読み、字を書く。
- ・正しく鉛筆を持つ。
- ・挨拶、返事、後始末(履物を揃える)

という学習態度や学習習慣の徹底である。

趣味として水彩画を続けているが、今では絵を描くことより子どもたちへ数学や算数を教えることや、時間前に子どもたちと、学校のこと、家庭のこと、友だちのことなど話を聞いている方がずっと楽しい。「おじちゃん先生」と呼ばれ慕われ、少しづつ若返っているこの頃である。

健康のために 趣味を楽しむ

長崎市横尾 菅 一臣
(昭和三十一年卒)



退職して二年目、第二の就職で県体育協会に勤務しているとき、突然不整脈に襲われ、僧帽弁閉鎖不全症で心臓を手術する羽目になった。長年の不摂生のついでに回ってきたのだろう。

このときには、何とか平均寿命までは生きたいと思っていたのであるが、喜寿を過ぎた今は、己の定命を今更変えられないのであれば、せめて命の尽きる寸前までは健康寿命を保っていたいと願うばかりである。

少し古い資料だがWHOによると、二〇〇二年時の日本人の健康寿命は七十五歳で、平均寿命は八十一・九歳と報告されている。このことは、平均的に六・九年は誰かのお世話になり、介護を受ける

立場になることを意味する。その差をどうすれば限りなくゼロに近づけられるか。妙薬があればぜひどなたかご教授賜りたい。

私は若い頃から「人は楽しくないことには誘われない。誘われたら一度は付き合ってみよう」という気が強く、いろんなことに首を突っ込み、一応人並みに趣味はもっている。それらを生かすことで健康法につなげることができればこれにこしたことはない。

心臓を手術したことで身体障害者になってしまったが、身体に優しい「グラウンド・ゴルフ」で衰えつつある体力に活を入れ、退職校長会の「コーラス」で錆びついた感性をよみがえらせ、将来お世話になるかもしれない近所の老人ホームの「陶芸工房」では同好の皆さんと出来映えを鑑賞し、地域ふれあいセンターの「子ども囲碁教室」からは元気を貰い、孫たちとは「メルトモ」になり、その合間を縫って掛かりつけの病院で身体メンテナンスに励んでいる。

趣味を楽しみながら、アンチエイジングと健康寿命の保持のために、日々気持ち新たに挑戦しているところである。

猛暑の砌、会員の皆様のご健勝と、玉園同窓会のみますますのご発展を祈念申し上げます。

経験を糧にして

長崎市界 千葉 彩夏
(情報文化教育課程 平成二十二年卒)



社会人も二年目、まだまだ勉強の毎日ですが、次第に仕事を任せてもらえるようになり、社会人らしくなってきたかなと思います。

現在私は営業部に配属され、主にお客様対応をしています。電話はもちろんのこと、実際に現地へ出向いてお客様とやり取りをすることも多々あります。

私が初めて出張を経験したのは昨年十二月、行った先は岩手県でした。何もかもが初めてでしたが、「お客様から見たら新人もプロも関係ないからね」と上司からの言葉を受け、お客様を不安にさせないように、緊張しながらも笑顔で接するよう心がけました。そして業

務を終え帰崎する頃には、「また来てくださいね」と言っていただき、とても嬉しくやりがいを感じられたことを覚えています。

しかしその三か月後、あの東日本大震災が起きたのです。ついこの間訪れた場所が、テレビで見るとような悲惨な光景になってしまっているなんて考えられなかったし、決してひとごとではありませんでした。お客様に何度電話をかけても通じず、無事を祈ることしかできませんでした。数日後ようやく連絡が取れ、「店はひどい事になっているけれど従業員はみんな無事」と聞いたときには「本当によかった」の一言でした。

それからしばらくのうちは慌しい毎日を送っていましたが、現在は少しずつ落ち着いてきています。

この一連の経験を通していろんなことを感じ、考えました。自分は営業担当としてお客様のために何が出来るのか、変化する日々の中で答えを出すことが難しいときもありますが、これからもたくさん経験を通し、お客様から頼られる存在になっていけたらと思います。

来年も元気で 青春に乾杯

長崎市鳴滝町 平下 喬一
(昭和三十三年卒)

昭和三十三年に、学芸学部中学四年課程を卒業した十五名の私たちは、ここ二十年近く、毎年同窓会を開いている。

きっかけは、恩師西島宏先生が退官なさるとき、先生をお招きしてクラス会を開いたことであつた。その席で、「これからも同窓会を開いては」という機運が高まり、早速その翌年に集まつた。

その後、出張などで長崎に誰かが出てきたときなど、誰かが呼びかけて、不定期にクラス会を開いていたが、誰言うともなく毎年集まるうというところに話が盛り上がっていった。

ある年、長崎に集まつたとき、参加者のひとりが、奥さん同伴で来崎していることがわかり、「それならば来年から配偶者同伴のクラス会にしよう」ということになった。

その後、各地にいるクラスメートの世話で、県外では湯布院・日田・耶馬溪・山鹿・武雄など、県内では長崎市・佐世保市・口之津・小浜・雲仙・西海・伊王島などと、配偶者同伴でのクラス会を

開いてきた。

定年退職をしてはや十有五年、残念ながら四名の同級生が彼岸へと旅だつてしまった。残つた我々も病院とのつきあいも増え、体力の衰えも感じるようになってきたこともあり、一昨年の会で、「来年からは日帰りで、青春時代を過ごしたなつかしい長崎の地に集まろう」ということになり、夫婦同伴の会は現在に至っている。

「来年も元気で会いましょう」を合言葉に、今後いつまで続けられるかわからないが、できるかぎりこの会が長く続くことを願っている。



中田秀次氏 叙勲受章祝賀同窓会 於セントヒルズ会館 26日09.30

絆を深めた「三九会」同窓会

長崎市片淵町 白川 忠浩
(昭和三十九年卒)

平成二十二年十一月二十日、晩秋の嬉野温泉郷和多屋別荘にて、昭和三十九年長崎大学学芸学部保健体育科卒業生十四名中、十名参加のもと古希祝い同窓会を開催。三十九年当時本県は、教員の人材不足の為、卒業生全員が就職に就くことが出来た時代であつた。

また、東京オリンピック開催年にあたり、新幹線の開業などで、五輪景気に沸き、日本選手の活躍で多くの国民がスポーツに関心を寄せ、運動が生活を豊かにしてくれる手段として理解されるようになった。学校教育活動においてもオリンピック開催が追い風となりあらゆる領域で生徒の学習意欲を高める効果が期待できた。

三十八年間の教職生活の中で、就職先は中学校、高等学校と職種は異なつていても「生涯にわたつて健康で安全な生活を送ることのできる生徒を育成する」という教科体育の共通の目標に向つて、特色ある学校づくりの一翼を担えたことに喜びを感じる。退職後に生かして、地域のリーダー、教育関係機関等で活躍中である。



夕刻より古希祝いの宴を開会。亡き恩師、若くして他界した同期生に黙祷、乾杯に続き話題は学生時代にタイムスリップ。青春時代に汗し辛苦を共にしてきた仲間同志、心は直ぐに通じ合えるだけに四十八年の時を越えて思い出話は尽きず、大いに旧交を温めることができた。

外見は白髪交じりでも体力・気力は充実しており、心は青春そのもの。お互いに健康で活力に満ちた人生を送れていることに感謝。余興での豪華景品付抽選会も終わり、次年度、鳥原での再会を誓い惜しみながら散会となつた。

動いています同窓会

総務部会

第一回総務部会を、三月二十九日に開く。

総務部から、平山・小西・木村・仲・渋谷の各部長、事務局からは、小川会長・濱崎事務局長・担当の野中が出席して話し合う。主な内容は、予算執行に伴う「青少年育成事業」に関する「義援金」の支出について、公益法人の見直しに関する「委員会設立」について話し合う。

第二回総務部会を、五月十七日に開く。

総務部から、平山・小西・木村・仲・渋谷の各部長、事務局からは、小川会長・濱崎事務局長・担当の野中が出席して話し合う。主な内容は、七月三日(日)に開催される、理事会及び評議員会の運営に関する事項です。①昨年度の事業報告、それに伴う決算報告及び監査報告 ②本年度の玉園同窓会の会員の動向、事業内容とそれに伴う予算等 ③公益法人 等について、話し合う。

これを受けて、理事会・評議員会を開催する。詳細については、会報「たまごの」(一二七号)を御覧ください。

教育・研修部

本年度も、二十三年度の教育学部の学生(準会員)に対する就職支援事業を計画する。教育・研修

部の山田・宮地・木村・仲・野口・上野の各部長が担当する。

本年度は、学部との関係で、昨年度までと違い、一次合格者を対象とした就職支援活動を実施する。まず期間は、七月下旬から九月上旬までの約八週間とする。まず関東・関西地区受験者を対象に、次に長崎・九州地区受験者を対象にして支援を行う。

広報部

第一回広報部会を、五月十九日に開く。

山崎・大隈・中島・渡邊・原の各広報部長、事務局から小川会長・濱崎事務局長・担当の尾崎が出席し、まず会報「たまごの」二十三年度の編集方針及び作成計画について話し合う。公益法人の見直しを機に構成・内容等について刷新を図れないか検討するが、公益法人のねらいや同窓会の定款等の関係から、なかなか良い案が見られず、例年通りとする。

次に会報「たまごの」(一二七号)の編集計画や作業日程について話し合う。特に「主題」について、最近の教育課題や話題を洗い出し、現場の状況等から決定する。関係の支部長さんをはじめ、執筆いただきました会員の皆様には、心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

東京支部・総会

東京支部事務局長 瑞秀 政裕

昔の支部総会は、構成に現職が多く、昇任を祝したり退職慰労や情報提供などが趣旨であった。今は、個人情報保護などから新会員発掘は難しく、年々高齢化が進み、総会の様子も同窓の絆を懐かしむ懇親会へ変容した。

平成二十二年十月二日(土)開催の東京支部総会概略を報告する。

会場は、東京都大田区西蒲田のブライダルパレス「ア・ペア」。

出席者(卒年順/敬称略)十八名。森 清見・笹口 淳・竹中寅雄・林田莊七・大瀬良佐吉・瑞秀

政裕・畑島喜久生・上田格一・徳永昭典・本澤利夫・松浦隆馨・武田公夫・北村 清・中島 敏・久保田和仁・三村修一・望月信隆・大塚幸子

◆瑞秀幹事長の司会で、前年度の物故会員(浄園満成様・神宮長流人様・永松俊三郎様・小林英一様)に対し黙祷を捧げる。続いて

武田会長の挨拶を戴き、会長を議長に定期総会の議事に入る。

▼会務報告※瑞秀幹事長より総会までの経過報告(七月幹事会で定期総会の原案審議、会費納入状況、本部会報との連携：退会届二名、

新入会員大塚幸子様、総会案内八十九通発送など)。

▼平成二十一年会計報告※徳永会計より(決算報告書により収支について説明報告。支出面で考慮した事として、会議費として幹事会

出席の役員や幹事に若干額の交通費分を費用弁償するようにした：その他、物故者遺族へ香料のお届

など)。

▼会計監査報告※畑島・本澤会計監査より(帳簿等照合の結果、収支が確実であり出席者全員の拍手で会計及び監査報告が承認)

▼本年役員組織承認では(現役員より辞退：の意志表示もあったが、以後の役員会課題とし、一応全再

任が承認される。〔以下懇親会〕



幼稚園

「夢いっぱい 笑顔いっぱい
附属幼稚園」をスローガンに掲げ、
園・家庭が連携を密にしながら、
教育活動を行っています。

子どもたちの伸び伸びと遊ぶ姿、
好奇心から一心に見つめる眼差し、
溢れるような意欲、未来に生きる
子どもたちの育成に向け、
保育実践の蓄積をしています。

また、十月二十八日(金)に
は、「小学校以降の学びを
見通した幼児の学びの探
求」をテーマに、幼児教育
研究協議会を開催する予定
です。多数の御意見・御指導をお
願いたします。

小学校

六月十七日に開催した授業研究
会(国・算・体・複式)に多数の
参加を戴き、お礼申し上げます。

今、附属
校園では

本校は七月に第二回目となる韓
国ソウル市にある漢陽大附設小学
校との交流をメインとした六年生
の修学旅行を実施しました。タフ
な国際人としての資質を今後も一
層高めていきたいと思えます。

研究は「文化の創造者としての
子ども」の三年次を迎えました。
批判的思考力を論理的な表現力に
発展させ、研究をしめ
くくりまします。

二月三日(金)の発表予
定です。多数の御参観
をお願いいたします。

中学校

附属中学校は、「はつらつと学
ぶ生徒の育成」を主題として最終
年次の研究に取り組んでいます。
「言語活動の重視」を柱として、
各教科がそれぞれの主題を設け、
実践を進めているところです。言
語活動は、新学習指導要領におい
て教育内容の改善事項として最も

重視されています。この言語活動
を位置づけたカリキュラム開発や
指導方法の工夫・改善を通して、
これからの学びの場づくりや指
導・評価の在り方を研究発表会等
において提案し、地域の教育拠点
校としての役割を果たしていきたい
と思えます。

特別支援学校

本校では、現在「自己の育ちを
支える小中高一貫した進路指導の
授業の在り方を考える」という
テーマで研究に取り組んでいます。
各学部で実施している指導形態
「進路」の授業を、様々な角度か
ら分析することで、一人一人が主
体的に取り組める授業を目指す
とともに、高等部卒業後の豊かな生
活のために、小学部段階から必要
な内容等を明らかにしていきたい
と考えています。平成二十四年二
月十日に公開研究発表会を予定し
ています。是非お越しください。

新会員紹介

平成二十二年卒業生

学校教育教員養成課程

初等教育課程

小学校課程

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 森田 慧 | 立石 晃平 | 山口 末祐 |
| 赤岩 弘明 | 田中 千尋 | 吉丸 智賢 |
| 池部 聖崇 | 田中奈々美 | 磯邊可奈子 |
| 稲田 花子 | 谷山 麻香 | 三根健太郎 |
| 岩本 卓也 | 地浦 結 | 池田 千枝 |
| 宇座 千晴 | 網田 悠平 | 伊東さくら |
| 宇都宮優子 | 富野 華奈 | 今泉統貴子 |
| 恵濃奈津美 | 中野 唯香 | 上ノ蘭陽子 |
| 小田 佳澄 | 西林 春奈 | 牛嶋 理恵 |
| 小野 尚恵 | 野中 卓 | 枝光 健太 |
| 金子 真也 | 橋本 真希 | 大津 秀美 |
| 川波 翔吾 | 濱口 志帆 | 小野 詩織 |
| 川本裕美子 | 濱田 知世 | 梶原奈都美 |
| 木原 亜咲 | 平川 光夢 | 川崎 紫 |
| 合田 智美 | 平田志津佳 | 川村 拓也 |
| 小宮 千穂 | 平山 沙織 | 岸川 法子 |
| 近藤 雄太 | 福田 聖子 | 草野 法子 |
| 篠原明日香 | 淵上 夏妃 | 上妻 明樹 |
| 末成 清華 | 前田 涼子 | 小柳 理沙 |
| 須原さゆり | 松本 知子 | 坂本 志織 |
| 田浦 愛 | 三井 優子 | 下田 翔吾 |
| 田崎 和美 | 村崎 良平 | 杉下 宣天 |
| | | 瀬崎由佳子 |
| | | 岳下 朋央 |
| | | 豊屋 詩歩 |
| | | 立野 雄大 |
| | | 田中奈津美 |
| | | 谷川 志穂 |
| | | 田村 志穂 |
| | | 辻下 知美 |
| | | 鶴田 まみ |
| | | 中島る美 |

情報文化教育課程

中道里沙美	藤野まどか	森 亜佑美	横尾 仁甚
野添 志恵	前田ちひろ	(美術科)	(家庭科)
伯川美由紀	馬込 未希	小林 祐子	栗戸 万里
馬場 慶	道越 文香	飛水亜紀子	一ノ瀬映子
浜崎 彩夏	峯 美佳子	宮崎 志保	猪原 美貴
春木 美香	森 春葉	迎 愛香	岩崎 郁美
平瀬 由貴	山本 晃佑	(保健体育科)	馬場ちえみ
平野久美子	脇内明日香	神村 勇吾	(英語科)
平山 達也		吉良 悠希	富永 聡子
		前田 晃宏	森 敦郎
		丸尾 梨華	池田 純
		若杉 一秀	石榮 秀昭
(国語科)	野村 貴	原田 孝昭	井上 翔次
岩崎まるみ		平山 莉映	山内 瑛二
小野 香		廣島 彰浩	山本 桜子
茅野 瑞穂		湯村 舞	鶴澤 海
小波津 翔		脇浜 貴広	大畑 哲
中井 敏貴		園田 明奈	佐藤 拓哉
前川 智美		(理科)	田中 克征
牧統 美香		今福 志帆	山口 翔史
吉丸 麻衣		大坪 亮平	山口 翔史
(社会科)		池間 強志	大野 大輝
大坪 麻衣		大野 尚美	青木愛里菓
下川 修平		川上 愛未	伊藤 里沙
津口 春香		豊永 哲也	岩本 茜
中村 竜也		中園 千慧	濱崎 早智
橋口 貴紘		前原 啓憲	山口 陽子
百岳 真吾		山口 陽子	浦 沙織
山内 麻衣		(数学科)	古賀 陽子
市原慎太郎		(音楽科)	嘉玉莉夏希
蔭山 達哉		河野真実子	中村 文

平成二十三年年度 評議員会報告

日時 平成二十三年七月三日(日曜日)
出席 理事・評議員(委任状の提出、二十五名) 監事・幹事・顧問を含め五十二名出席

第一号議案「役員の改選」
「理事」任期満了・死亡等により六名の理事が辞任され、新たに西平千治、山崎滋夫、峰松終止、藤木卓、一ノ瀬薫の先生方が就任。「監事」新たに小田恒治先生が就任。「幹事」本人の事情・転勤等により五名の幹事が辞任され、新たに野田和宏、上野國博、赤井君博、池田英俊の先生方が就任。

第二号議案「二十二年度の事業報告・決算報告」
1) 事業報告
・平成二十三年四月 準会員、終身会員への入会案内送
・会報の発行(年二回)
主題「新学習指導要領の具現化に向けた我が校の実践」を掲げ各校の現状を発表していただいた。

第一二五号(十六ページ) 八千四百部、十月一日発行
第一二六号(十八ページ) 八千四百部、二月一日発行
・教育学部への支援
・準会員への就職等に関する指導助言。

・長崎大学原爆殉難慰霊祭への参加及び献花
・地区懇話会の実施
二十二年十一月二十七日(土曜日) 南島原支部にて実施。山路裕昭学部長先生はじめ、二十八名参加。

・長崎大学全学同窓会(ホームカミングデー)への参加
第三号議案「二十三年度の事業計画・予算案」
・会報「たまごの」の発行 一二七号(十八ページ) 一二八号(十八ページ)

・地区懇話会の開催(平成二十三年十一月二十六日 諫早支部)
・教育学部への支援(特に学生の行事等への支援費のアップ)
・長崎大学全学同窓会との連携強化
備考 二十二年収支計算書及び二十三年収支予算書は次のページに掲載

収支計算書

平成22年4月1日から平成23年3月31日

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I. 収入の部				
1. 入会金収入	420,000	348,000	72,000	
入会金収入	420,000	348,000	72,000	3,000円×116名
2. 会費収入	3,125,000	2,902,000	223,000	
会費収入	3,000,000	2,817,000	183,000	1,000円×2,817名
終身会費収入	125,000	85,000	40,000	5,000円×17名
3. 雑収入	500	86	414	
雑収入	500	86	414	
4. 繰入金収入	2,200,000	2,200,000	0	
繰入金収入	2,200,000	2,200,000	0	基金会計より繰入
当期収入合計(A)	5,745,500	5,450,086	295,414	
前期繰越収支差額	520,866	520,866	0	
収入合計(B)	6,266,366	5,970,952	295,414	
II. 支出の部				
1. 事業費	3,460,000	2,827,779	632,221	
会議費	480,000	479,482	518	会議要項作成、召集旅費、昼食代、地区懇話会
渉外費	170,000	75,848	94,152	退職校長会、教師と子供の像 等
会報・発行費	1,980,000	1,719,879	260,121	会報2回の印刷・発送
名簿整理費	10,000	10,000	0	名簿作成資料代
セミナー開設費	170,000	157,000	13,000	講師資料代、反省会補助
学部・準会員支援費	220,000	128,570	91,430	長大祭、学部祭、退官教授祝賀会、卒業発表会
公益事業費	160,000	0	160,000	青少年健全育成事業助成
支部助成費	270,000	257,000	13,000	通信費、地区懇話会
2. 管理費	2,766,366	2,652,281	114,085	
報酬給与	1,440,000	1,440,000	0	職員報酬
法定福利費	0	0	0	労働保険料
交通旅費	240,000	237,640	2,360	交通費
事務用品費	100,000	65,016	34,984	コピー用紙、トナー交換、年賀状
消耗品費	20,000	6,073	13,927	お茶、灯油
借料	460,000	452,310	7,690	家賃、機器レンタル料
光熱水費	130,000	111,240	18,760	電気、水道 他
租公課	71,000	71,000	0	県、市民税
通信費	100,000	97,782	2,218	電話、切手
会費徴収費	100,000	88,480	11,520	会費振込料
慶弔費	20,000	15,750	4,250	祝儀、弔電
雑費	85,366	66,990	18,376	税理事務手数料、法務局登記、残高証明 他
3. 固定資産取得購入支出	0	0	0	
什器備品購入支出	0	0	0	
4. 予備費	0	0	0	
5. 繰入金支出	40,000	40,000	0	退職積立金特別会計
当期支出合計(C)	6,266,366	5,520,060	746,306	
当期収支差額(A)-(C)	△520,866	△69,974	△450,892	
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	450,892	△450,892	

収 支 予 算 書

平成23年4月1日から平成24年3月31日

(単位：円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
I. 収入の部				
1. 入会金収入	378,000	420,000	△42,000	
入会金収入	378,000	420,000	△42,000	※3,000×180人×0.7
2. 会費収入	3,100,000	3,125,000	△25,000	
会費収入	3,000,000	3,000,000	0	※1,000×6,400人×0.47
終身会費入会金	100,000	125,000	△25,000	※5,000×25人×0.8
3. 雑収入	300	500	△200	
雑収入	300	500	△200	
4. 繰入金収入	2,300,000	2,200,000	100,000	
繰入金収入	2,300,000	2,200,000	100,000	基金会計より繰入
当期収入合計(A)	5,778,300	5,745,500	32,800	
前期繰越収支差額	450,892	520,866	△69,974	
収入合計(B)	6,229,192	6,266,366	△37,174	
II. 支出の部				
1. 事業費	3,410,000	3,460,000	△50,000	
会議費	500,000	480,000	20,000	会議要項作成・召集旅費・地区懇話会
渉外費	150,000	170,000	△20,000	退職校長会・教師と子供の像 等
会報・発行費	1,950,000	1,980,000	△30,000	会報2回印刷・発送
名簿整理費	10,000	10,000	0	名簿作成資料代
セミナー開設費	180,000	170,000	10,000	講師資料代・反省会補助
学部・準会員支援費	280,000	220,000	60,000	長大慰霊祭・学部祭・美、音への支援 他
公益事業費	0	160,000	△160,000	青少年健全育成事業助成
支部助成費	290,000	270,000	20,000	通信費12,000×17支部・地区懇話会
義援金	50,000	0	50,000	東日本大震災義援金
2. 管理費	2,779,192	2,766,366	12,826	
報酬給与	1,440,000	1,440,000	0	会長・職員報酬
法定福利費	0	0	0	労働保険料
交通旅費	270,000	240,000	30,000	交通費
事務用品費	100,000	100,000	0	コピー用紙・トナー交換・年賀状 等
消耗品費	20,000	20,000	0	お茶、灯油等
借料	460,000	460,000	0	家賃・清掃費・機器レンタル料
光熱水費	130,000	130,000	0	
公租公課	71,000	71,000	0	県、市民税
通信費	100,000	100,000	0	電話、切手
会費徴収費	90,000	100,000	△10,000	会費振込料
慶弔費	20,000	20,000	0	祝儀、弔電他
雑費	78,192	85,366	△7,174	税理事務手数料、法務局登記、残高証明
3. 固定資産取得購入支出	0	0	0	
什器備品購入支出	0	0	0	
4. 繰入金支出	40,000	40,000	0	退職積立金特別会計
当期支出合計(C)	6,229,192	6,266,366	△37,174	
当期収支差額(A)-(C)	450,892	520,866	△69,974	
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	0	0	

役員紹介

—平成二十三年年度—

敬称略

(顧問)

山路 裕昭(長崎大学教育学部部長)

上尾 末春(元玉園同窓会長)

下釜 明(長崎県退職校長会長)

立岡 誠(長崎県教育会長)

(参与)

峰 信子(長師十九)

山田 喜孝(長師二十一)

小西 峯一(長師二十八)

(法人理事)

(会長理事)小川 大天(学芸三五)

(副会長理事)平田 徳男(学芸三七)

() 山崎 滋夫(学芸三七)

() 廣田 勲(学芸四七)

() 渡邊 洋子(学芸三一)

(理 事)平山 進(学芸二八)

() 宮地 計(学芸三〇)

() 藤木 卓(教育五三)

() 草野 昭(学芸三五)

() 木村 晃一(学芸三五)

() 濱崎嘉一郎(学芸三九)

() 峰松 終止(学芸四二)

() 西平 千治(学芸三九)

() 一ノ瀬 薫(長身南小校長)

(監 事)縣 恒則・島崎 賢一

(幹 事)原 慈子・野中 元則

(支部長) 評議員

長崎支部 若杉 晴久(上長崎小校長)

佐世保支部 山口 芳雄(OB・S48)

大村支部 筒井 昌則(三浦小校長)

諫早支部 村田 博(明峰中校長)

島原支部 立花 博(第一小校長)

雲仙支部 安藤 芳也(愛野小校長)

南島原支部 大野 義満(口之津小校長)

平戸支部 入口 政信(津吉小校長)

松浦支部 川崎 吉郎(OB・S46)

五島南松支部 笹山 義徳(三井栗小校長)

東彼支部 有田 洋史(彼杵中校長)

西海西彼支部 橋本 敦美(瀬戸小校長)

北松支部 中村 善也(口石小教頭)

壱岐支部 野口 慶子(筒城小校長)

対馬支部 杉本美津廣(厳原中校長)

国立大学法人・小・中・特別支援学校支部

高等学校支部 山本 圭介(付属中主幹)

(評議員) 筒井 保之(鶴洋高校校長)

長崎支部 菅藤 大三・富野 聡

田代 知二・松添 昇

金森 徹也

佐世保支部 松尾 克久・前田 英穂

山口 喜典

嘉松弘一郎・尾崎 俊輔
中島 玲子・本多 一郎
洪谷 翠・久富 和幸
大隈 智・仲 重利
野田 和宏・赤井 君博
上野 國博・池田 英俊

大村支部 石丸 菊弘
諫早支部 森 秀樹
島原支部 松尾 好則
雲仙支部 杉 武侯
南島原支部 田中 益良
平戸支部 松永 勤
松浦支部 藤田 哲夫
五島南松支部 岡村 珠樹
東彼支部 藤原 正
西海西彼支部 柏田 正
北松支部 松瀬 大高
壱岐支部 豊坂 敏博
対馬支部 薦田万州生

国立大学法人・小・中・特別支援学校支部
坂口 洋介・山田 勝大
田川 直行・菊川 洋二
中村 敦・玉島 健二
種川 啓介・中嶋 将晴

高等学校支部



一事一務一局一より

地区懇話会「諫早支部」で開催

地区懇話会も九回目を迎えました。毎回、各地区の退職された会員と、まだ現職で頑張っている会員が、共に学生時代に戻りながら、地域の教育を盛り上げようと語り合っています。会を重ねるごとに交流は深まり、先輩・後輩の絆を確かなものにするともに、各地区の教育振興に寄与していると確信します。

本年度は諫早支部で開催することになりました。会員の皆様、御出席よろしくお願ひします。

- ① 期 日 平成二十三年十一月二六日
- ② 場 所 道具屋

お知らせ
「長崎大学入生同窓会」開催される
「第三回長崎大学
ホームカミングデー」

「長崎大学入生同窓会」(第三回長崎大学ホームカミングデー)が、本年度も、開催されます。本年度は、学生によるサークル発表、バトン・吹奏楽・コーラスが予定されています。また、講演として「長崎―上海航路開設への期待―(講師・長崎県知事 中村法道様)が計画されています。そして、楽しみの懇親会も用意されています。多数の参加をお待ちしております。

- ① 期 日 平成二十三年十一月十九日
- ② 場 所 文教キャンパス